

---

# と・け・い

水色ペンキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

と・け・い

### 【Nコード】

N7991F

### 【作者名】

水色ペンキ

### 【あらすじ】

時計たちの住む天上の島に、突然現れたパジャマ姿の娘。どこから来たかも自分が何者であるかも知らないこの娘に、親切な目覚まし時計が声をかけた。やがて二人は結婚する。だが、二人の生活は長くは続かなかった。たった三日で、新郎は自らの命を絶ったのだ……。

## その1

新婦は絶望にうちひしがれていた。あまりにも早すぎる新郎の自殺、一夜にして寡婦となった若い娘。ああ、世界はすべからく無情とはいえ、こんなことがあっていいものだろうか？

新郎が自ら命を絶った理由について、周囲の者にはようとして知れなかった。新妻との不和？　だとしたら、なぜ新婦はあんなにも泣きはらしているのか。お互いの気持ちの行き違い？　だとしたら、もう少し様子を見てもよさそうなものだ。しかし夫婦を知るもので、新婦の涙の理由を疑うものなどいなかった。この喪服　黒いパジャマ　を着た娘は、まさしく最愛のひとを失った悲しみのどん底にあるのだ。だったら、なぜ？　なぜ夫は自ら命を絶ったのか？

自殺した夫は目覚まし時計であつた。丸い文字盤のうえにふたつのベルを乗せたその体は、愛嬌ある寢室の友として、また安眠と起床の番人として、世界中で根強い人気を保っていた。これはつまり、この奇妙な町での彼の立場が強いことと同義であつた。形而の海に浮かぶこの小さな有人島は、ふたつ名に時計の島とも呼ばれるとおり、ほとんどの住人が時計で占められていたのである。その希有な例外は、ながらく一羽の鶏と一人の老人だけであつた。

目覚まし時計は愛用のステッキで石畳を突きながら、毎日決まつた時間に決まつた経路を散歩してまわつた。時間に正確なことはこの町の住人すべてに共通した美德で、これを具えない者はこの町に住む資格がないといつてよかった。比喻ではない。時を刻むに正確なことは、彼ら全員が共通して奉じるただ一つのアイデンティティなのだ。

さて、時計が散歩するというと奇妙に聞こえるかもしれない。しかし、イデアの空には遠く届かぬこの島では、呼吸する空氣の濃さのためか、注ぐ日差しの薄さのためか、物質界の表象たちといえど

も、相当に気楽な暮らしが許されていたらしいのだ。厳しく運用されるルールはさきにあげた一つのみ、それ以外は自由気ままだ。目覚まし時計にとって昼間は完全なオフだったから、もてあました時間をどのように使うかは、彼にとって悩ましい問題だった。ともかく、目覚まし時計は散歩したのである。

散歩路は港を経由していた。港には定期的に船が入った。船乗りは計量スプーンや物差しといった度量衡の子孫たちで、時計島の住人にとっては従兄弟のようなもの、仕事の正確さに関しては彼らにもまさる優秀な海の男たちであった。なにしろ時計たちは道端で顔を合わせるたびに相手の時刻を確認し、ずれているようなら物かげでこっそり較正するというようなズルをやっていたが、計測機器たちは概して強力な自己を保持しており、定期検査の合間に大きな誤差を抱え込むようなことは、ほとんどまったくといっていいほどなかった。これは彼らのすぐれた資質であった。

だから船乗りたちがひとりの人間の娘を棧橋に降ろしたとき、誰もがなにかの間違いだろうと考えた。彼女はどこからどう見ても時計の仲間ではなかったからである。

娘は質素なパジャマを着ていた。子供というほど幼くはないが、大人というほど独り立ちしているようにも見えなかった。持ち物といえば、小脇に抱えた枕だけ。目覚まし時計が通るかかったとき、娘は石畳の上で時おり裸足を踏み換えながら、眠たそうな目であたりを見まわしていた。

こんなところで何を？ 目覚まし時計は尋ねた。娘ははじめ、呼びかけられたのが自分だということに気づかず、ぼうつとあたりを見まわすだけだったのだが、目覚まし時計がちりんとベルを鳴らすに及んで、ようやく自分の注意を引こうとしている者がいることに気がついた。

わたし？ 何かご用？ 娘は答えた。目覚まし時計は困惑した。

別にご用はないのである。ただこの奇妙な客人に、ふとした興味を覚えたただけだ。そんなとき不意に話しかけることをためらわないほど、時計の島は変化に乏しい土地であった。目覚まし時計は赤面した。

いや、あの、妙だなと思って。妙？　ここは時計の島で、人間が来ることは滅多にないんだ。そうなの。旅行ですか？　いいえ。尋ね人でも？　違います。じゃ、なぜここに。さあ。

そこに警官が通りかかった。警官は日時計で、時計たちの長老格であった。彼が警官を拝命したのには理由がある。つまり、彼が厳格なること他の追従を許さぬ極端なモラリストだったからである。他の時計たちはゼンマイ切れやムーブメントの故障で時を見失うことがあったが、彼は決してそのような失態を犯さなかった。誤差知らず。それが彼の誇らしい渾名だった。彼の得意は、普段自分の正確さを自慢している他の時計たち、特に原子時計のような若造が、数年に一度、『日時計に』合わせるために、一秒間心臓を止めることだった。だがむろんこの優越感には錯覚にすぎない。時刻が厳格に定義された現代においては、日時計はつねに系統的な誤差を含んでおり、お世辞にも正確な時計とは言いがたかった。それより彼が決して夜直を受け入れないことを皮肉って、住人たちは彼をして『ひる時計』、などと陰口を叩いていた。夜直はすべてもう一人の警官、ランプ時計が担当していたのだ。

話を戻そう。

通りがかった警官こと日時計は、問答する目覚まし時計と人間の娘に職業的な関心をよせた。どうしたんです？　日時計は尋ねた。気の置けない市民の友。笑って傾げた頭のうえで、鋭い指針が宙を円く引つ掻いている。

やあどうも。こんにちは。何かお困りでも。いいえ。こちらは？　ええ、どう説明したら。いったいまた。私はべつに。楽になさって。ははあ？　ええと、待ってください。ちよっと。待ってください

い。困っているかと言われても。ああ、あなたが。え？ 待つてく  
ださい。どういう意味？ 一体誰が喋ってるんです？ 失ごめん礼  
なさい。

ホンカンは！ 本官がいう。お困りの方をお助けするのが勤めで  
ありますから、その要するに、お嬢さんがお困りなのではないかと。  
はあ。靴も履いていらっしやらない。まあ。一体どうされたんです、  
この男に何か。ちよちよと待つてくさいよ。あらそんな。  
私はそう、あなたと同じで、このお嬢さんが困っているのではない  
かと。ふうむ。……。で、お困りではないんですか？ 実は少し困  
ってます。どういうふうに？ なんでここにいいのか、よくわから  
ないんです。ほう。その質問は私がさつき。君は黙っていたまえ。  
……。いつここへ？ 気がついたときにはもう。ここにくる前は？  
さあ。どちらへ行かれるご予定で？ わかりません。日時計は肩  
をすくめた。

「妙な話ですね」怪訝そうにつぶやく目覚まし時計に、背の高い日  
時計は、阿呆を見るような視線をおろした。「そう妙というわけ  
もない、当面の行き先を知らない者はありふれているし、誰しも最  
初はどこでもないどこからやって来るのだからね」警官の声はい  
かにも落ちついていて。だが、頭上の針が値踏みするように小さな  
輪を描くのを娘は見逃さなかった。次の声は娘に向けられたものだ。  
「事情はわかった。ただ、ここは時計しか住めない町でね。き  
みが何者か、ここに定住することを希望するのか、立ち去る  
ことを望むのか、色々はつきりさせねばならないことがある。署ま  
で来てくれるかね。ここじゃ足も冷たかろうし」

娘ははいと答えた。

「それじゃ目覚まし時計くん悪いが」「日時計は目覚まし時計を  
見下ろしながらいう。「役場に行って、住民課のハト時計に署まで  
来るように伝えてきてくれないか」「お安いご用です」

日時計は娘を導きながら、警察署に向かって街路を渡りはじめた。  
一方目覚まし時計は役場へ向かって歩きだしかけたが、はたと立ち

止まって振り向いた。

「待って、お嬢さん」

警官と娘も振り返った。

「？」

「これを使って。なるべく足に体重をかけないようにすれば楽でしょう。この街路は磨り減っているけど、デコボコがないわけじゃないからね」

目覚まし時計は娘に歩み寄ると、持っていたステッキを差し出した。娘は一瞬ぽかんとしたが、すぐに微笑んでそれを受け取った。

「ありがとう。ときどき石が痛かったの」

目覚まし時計はベルの端をつまんでお辞儀をすると、二人に背を向けて歩み去った。警官と娘も、何ごともなかったように歩き出す。朝の空気に、ぺたぺたという裸の足音が軽く響いた。

ステッキは娘には短かった。

## その2

署に到着した日時計と娘が雑談などしているうちに、連絡を受けた八ト時計が息を切らせて現れた。一体どうしたっていうんです？ 八ト時計は訊いた。移民？ いけませんよ、人間の娘なんて。いやまだそこまでは言っていない。では何だって私を。いやね、やっぱりその移民手続きについてなんだが。ほらいわんこっちゃない。知るべきことを知ってから判断させたくてな。どっちにしろ、住まわせるところなんてありませんよ。土地は十分にあるじゃないか。時計にはね。あの老人だって住んでいる。彼は腹時計で。まあ聞け、この娘の出現は唐突だったのだ。それと移民と何の関係が。突然港に現れてね。誰だって最初は唐突ですよ。わかっているじゃないか。なんですって？ この娘は『来た』のではなくて、『生まれた』のかも知らん。……。

じゃああなたの意見を聞きましょう、この娘は何なんです？ 時計さ。そうは思えませんが。この娘がこの島に現れたのは、この娘が時計以外の何ものでもないからだ。その理屈はどうでしょう。例外があるかね。さあ？ それみる。しかし、先例をすべて調べるというわけにも。ふうむ。むしろこの娘の時計としての資質を試せば、それで済むことではありませんか？ それもそうだ。ねえ、ちよつとあなた。

「わたし？」

「ほかに誰がいるというのかね、エヘン」

「ちよつと、そういう言い方はよしてください、ええとですね」

「なにかテストでも受けるって感じね」

「そういうことです。試験官はこのわたくし」

「どんなテスト？」

「これから頭の中で、一分の長さを計っていただきます。わたくしがスタートといったら耳を塞いで、ちょうど一分後に一分！ と叫



んでください。誤差が一秒以内なら、まあ合格としましょうか」

「ずいぶん安易なテストだな。それに時計というよりストップウォッチのような」

「やらないよりはマシでしょう。とりあえずテストをやったという実績が欲しいんなら、こんなもんで十分ですよ。まともな時計なら、こんなテストくらい簡単でしょう」

「それは私へのあてつけかね」

「え？」

「あのすいません、なんで耳を塞ぐんです？」

「あ、わたしのチクタクが聞こえてしま……ちょっと、なにをするんですか」

「日時計を馬鹿にしよう。時計は絶対時刻を正確に示すのが仕事だ。お前らのように相対時刻の中に住んでいるやつらはどうしてこう」

「まま待って下さい、気に障ったんなら謝ります」

「耳を塞ぎますね？」

「だいたい機械時計なんてのは貴様のような……」

「ムッ、なにを失礼な。あなただってどうせ経度……」

「……！……！」

「……！………？」

「……！」

「………、………！………！」

（あの、ちょっと）

「………！」

（危ない！）

「………」

「………！」

「」

パップー、パップー、パップー、パップー、パップー、パップー

「あの、テストのほうは一体」

「ああん？」

パップー、パップー、

「ちよつとハト時計さん、ハトさん、」  
パップー。

「気絶しとるよ。まったく気に食わん奴だ。だいたい時計つてのは  
もともと」

「あたしのテストは」

「正午が基準で、正午つてのはつまり南中時刻、これがわかるのは」  
「あの……」

「チツクタツク、くだらん、実に」

「怒りますよ？」

娘が少し口調を変えた。ここでようやく日時計は肩をすくめる。

「ふん、止まっていようがずれてようが時計は時計だ。いまこの役  
立たずを時計と呼ぶなら、あんたがそうでないなんて誰に言えるね」  
「いったい何のお話です？」

「合格つてことさ。この日時計のお墨付きでな。ハトが起きたら言  
つておくよ」

「なんだかよくわかりませんが、ありがとう」

「勘違いするなよ。あんたが本当に時計かどうかは、われわれでは  
なくこの町が決めることだ。住民不適格だとしたら、早晚、運命の  
やつが君をここから追い出すだろう。もうひとつ、ここには人間が  
ほとんどいない。暮らすのは大変だぞ。仕事も見つける必要がある」

「はあ」

「まあ、せいぜい頑張るんだな」

伝え聞くところによると、娘はそのあと腹時計のところに相談に  
行ったらしい。だが島唯一の人間を自負していた腹時計は、この新  
参者に冷淡だった。にべもなく追い払われた娘は、だが、腹時計が  
時計修理人の看板を掲げているのを見て、思うところあったに違  
い。彼女はそれ以上の相談相手を求めることなく、難なく生計の

道を見いだしたからだ。娘には腹時計のような技術はなかったが、商売はワザだけでやるものではない。

娘は港のそばに小さな部屋を借りて（どうやって借りたのだろうね？）、入り口に小洒落た看板を出した。

『あなたのゼンマイ、巻きます』

あなたの、である。よりによって『あなたの』。

最初の客がやって来るまでに数日かった。だがそれを過ぎると、噂が噂を呼んで、店はたちまち繁盛した。

ここに典型的な客の例を挙げよう。

「ゼンマイなんて誰が巻いたって同じだろ？」「いやいや、わかってないね、あの爺さんに乱暴に巻かれるのよりかは、よほどね」「つてもよ、巻きすぎで機構を痛めたりとか、鍵を握った手がぶれるとか、やっぱり不安じゃねえか、爺さんその辺しっかりしてるからよ」「壊れて困るようなムーブメントかい」「そりゃ困るさ」「わかってねえなあ、コッチ、コッチ、永遠に同じことやってたって芸がねえ」「そりゃあお前、さすがに言い過ぎじゃねえか」「お前それでいいのか、故障しないのがそんなに偉いか」「故障はするさ、むしろ俺はお前より」「でもお前は壊れやすい特殊機構が自慢なんだろ」「そりゃそうさ」「だったら……」

ガチャリ。

「あら、おはようございます」

「あ、ああおはようさん」

「どうも」

店の前でがなり合っていたのはオルゴール時計と自動巻き腕時計だった。ゼンマイに関して淡泊な感想を述べていたのが自動巻き、それに反論していたのがオルゴールだ。オルゴール時計はこの店の常連、自動巻きのほうはただの冷やかしだったが、朝も早よから店の前にたむろなんぞしているのは、やはりこの新住人に多大な興味があるからであった。

(可愛いじゃねえか)

(おうよ、これからあの娘に一曲聴かせようかと思ってな)

(これから?)

(俺の持ち歌は4曲だ。朝八時のやつが一番爽やかなんだよ)

(あと1分か)

「開店は9時からですよ。またあとでお会いしましょう」

(あっ)

ガチャン。

(……)

チツク、タツク、チツク。

(……)

ポンポロポロポンパラピンパロポロ

(やめる恥ずかしい)

ポンポンポロピロ。

(やめろよ馬鹿)

(……)

ポンポロ。

(……泣くなよ)

(……)

ポロロロロ。

罪なき時計たちの心をこうまで乱した娘だったが、むろん自動巻き時計のようにゼンマイを必要としない者も多いし、またゼンマイ式であっても、この店を贖罪にしない向きが当然あった。しかし無骨な老人の手で巻かれることに慣れた古時計たちにとって、弱く柔らかい指で巻かれるバネのたどしい振動は、空洞のボディに一種淫靡に響いたようである。とくに首から巻き鍵を提げた大型の時計たちは、臆面もなく日々この店に通った。キイをそつと鍵穴に入る瞬間が、何ともいえぬ快感なのだそうだ。そういう仕組みを持たぬ時計たちの間では、彼らのゼンマイ屋通いを破廉恥なものとし

て白い目で見える空気があった。が、休むことなく時を刻むことを課された彼らだ。日常の区切りに小さな楽しみを求めたとしても、誰がそれを責められよう。もっとも大型のクランク式巻き機を持参して、店の前の路上で巻いてくれと頼み込んだ塔時計のような輩には、さすがに味方する者がなかったようだが。

くどくなつた。話を先に進めよう。

このように一躍街の有名人となつた娘だったが、われらが紳士目覚まし時計、何がわれらのなのかわからないが、とにかくわれらの主人公たる目覚まし時計君は、最初の半年娘の店に現れることがなかった。目覚まし時計はゼンマイ式だったが、ベルを鳴らす機構とバネを共有していたために、毎朝必ず一杯まで巻き直さねば散歩もままならなかつたのである。そのために、昼間はむしろ充実した動力でもって街を闊歩することができた。昼もひなかにゼンマイを締め直すなど、彼にとつてこれ以上無意味なことはなかった。

だが残念なことに、目覚まし時計は紳士だつたのだ。

ある日、街中でついにこの二人が出くわした。邂逅、などという素敵な言葉を使つてみたいところだが、この時点では二人の間にはまだ特別な感情はなかつた。物語の都合にあわせて事実を曲げるのは好ましくないから、ここではただ出くわしたとだけ言っておこう。娘は市場へ行く途中、目覚ましは散歩の帰りだつた。

「あら、」娘が言つた。

「目覚まし時計さん？ あのとときはお世話になりました」

急に呼ばれた銅製の体が、片脚を突いてくると回る。やがて娘に気がつくと、目覚まし時計は浮かせた脚を石畳に降ろし、回転をとめた。

「やあ、君はあのときの」

「どうも」時計の挨拶に、娘が微笑みを返す。

「ずっとその恰好なのかい？」言い忘れたが、娘はこの半年というものの、ずっとパジャマのままなのであつた。

「ええ、実は。スリッパは見つけたんですけど」

「人間むきの服なんて、ここじゃなかなか手に入らないもんなあ。港で船が来るのを待って、巻き尺かマールサシにでも注文するとい。何ヶ月かかるだろうけど、彼らは人間の土地にも寄港するからね」

「いえ、この恰好でいいんです。わたし、普通の服に着替えたら、この土地にはいらなくなるような気がして」

「ほう？ そんなもんかね？ なぜ？」

「それは、？」

不思議な話である。このときに至ってさえも、なぜ娘がこの土地に住めるのか、はつきりと知る者はまだなかった。娘は自分の直感に頼るほかに、直感ほただちにインスピレーションを呼んで、語る言葉は意味のないお喋りへと発散していく。被服の話に始まって、ここでの生活のこと、食べ物のこと、時計たちのこと、会話は小鳥のさえずりのように途切れることなく続いた。くしゃみの気配が彼女の前を横切るまで。

くしゅん！

「すまない、長話に付き合わせてしまつて」目覚まし時計は詫びた。  
「いえ、いいん　くしゅん！　いいんです、あたし、くしゅん！  
あたしのお喋り、でしたから」くしゅん！

目覚まし時計はガラスを曇らせた。

「風邪をひいてしまうよ。帰って暖かくしておいた方がいい」

「ああ、でも　くしゅん！　市場へ、いけないと」

「ああ、そうか。じゃあ、必要なものを教えてくれたら、僕が買ってきてあげるよ。あとで港の近くを通るし、」

「え？　でも」

「そのときに届けよう。何を買えばいいのかな」心なしか、時計の秒針が力強く動いた。次の力チツを力を貯めてコチツ、待つように力チツ、抑えるようにコチツ、

「……人參とブロッコリーなんですけど、あるかしら」

「それは、どんな部品？」

一時間後、目覚まし時計は娘の店のドアを叩いた。娘はパジャマの上からカーディガンを羽織り、いかにも風邪引きという肩の丸め方でドアを開いた。目覚まし時計の差し出したカゴの中には、人参とブロッコリー、そして蜂蜜の瓶が入っていた。目覚まし時計は蜂蜜について、やや照れながら、露天のあるじがサービスをしてくれたのだと説明した。もちろん娘にはその嘘がすぐにわかった。娘の目には、買い慣れぬものを求めて市場でくると回転する危なっかしい時計の姿が、またやつと見つけた赤緑の野菜屋の親父に、人間の食べ物についてアドバイスを求める頼りなげな姿が、意識するともなしに浮かび上がった。

「寒いでしょう、お入りになって」

娘の指は差し出されたカゴをすり抜けて、冷たいクリスタルガラスの表面に触れた。部屋の中は暖かく、ガラスはたちまちのうちに曇ってしまった。

モノと人間との間に愛は成立するか。もちろん、する。道具は道具と言いながら、ひとはわが身を取り巻くさまざまなモノに愛着を感じるし、じゅうぶん大事にされた道具は、その機能でもって持ち主に応える。モノの大小、持ち主の性格、いろいろなケースがあるとはいえ、我々の経験はこの命題を、強く肯定しているといわざるを得ない。だが、それ以上の関係もありうる。という、あなたは信じるだろうか？ そう、冒頭で述べたように、この二人、機械と人間でありながら、同時により純粋な『法則』が支配する天上の住人は、数ヶ月後に結婚という、時計島史上前例のない関係を結ぶに至ったのである。これは全住民を驚かせた。式は時計の街の大広場を貸し切って（ほかに用途などないのだから、そういうこともできたのだ）、五日間にわたり盛大に執り行われた。グリーンと界面活性剤が振る舞われ、この滅多にないイベントのために、腹の中の

スプロケットを交換したものでいたそうである。そう、めったに  
ない。最初で最後の。大イベント。時計の島のお祭り騒ぎ。

そして式の三日後に、目覚まし時計は自殺した。



### その3

「もう泣くのはよして、ねえさん」葬式が済み、壊れた新郎が運び出された翌日のことだ。閉めた店を何個かの時計が訪れた。ハンカチーフを取り出したのはデジタル目覚まし、死んだ金属目覚ましの弟である。彼はなんとか娘の気を鎮めようと、優しい努力を続けていた。日時計と腕時計もいた。彼らはゼンマイを持っていなかったから、寡婦のもとを見舞うことに対して、何のてらいを疑われる心配もなかった。店の常連たちは娘を好いてはいたが、同時に死んだ目覚まし時計への複雑な感情が拭いきれない。時計たちはおしなべて律儀だったから、こういうとき、自らの本分をこえた出しゃばりはしないものなのだ。

娘は泣きはらしていた。当然である。状況はすべて、新婦の心を打ちのめすように作用していた。目覚まし時計は遺書をしたためていなかった。理由は不明である。娘に知らせることなど何もない、ただ死にゆく、それが目覚ましの望みだったということなのか。あるいは、死ぬことが目覚まし時計の本然で、いまさら何の説明も要しないということなのか。あるいは、その両方だったのか。

目覚まし時計は部品取りのために、腹時計の爺に引き取られていた。ただし、二つの古風なベル　目覚ましの上についていた、あの　と、それを打つハンマーだけは、ほかの時計には使い道がなく、娘のもとに残された。女が男を裏切ったのか、あるいは男が女を裏切ったのか。寡婦が優しくベルを撫でるのを、三つの時計は複雑な心持ちで眺めるのであった。

うち沈んだ空気にあてられて、誰もがずっと無言だった。もつともこの三人組、僅かに音の出る腕時計以外、もともとチクタク喋り続けるのが得意な時計たちではなかった。と、きゆうに窓の日が陰って、日時計の影が床の中に溶けた。日時計ははっとして、大きな

体をぶるりと震わせた。そして、言った。

「まったく辛気くさい。みんないかれてしまうぞな。腕時計、踊れ。デジタル時計、スロットマシンでもやってみろ。目覚ましの野郎はもうおらん。残ったものは残ったものでやっていくしかないのだよ、エヘン」

腕時計は頷くと、金属のバンドをくねらせて、奇妙なダンスを踊りはじめた。静かな部屋に、ちゃらちゃらというリズムカルな音が響きはじめた。日時計は鈍重な足もとを床から上げて、尖った先端を剣のように振り回して踊った。見るからに危なっかしいが、止めるものは誰もない。まるで馬鹿のような振る舞いだったが、娘の気を紛らすために、彼らにできるのはその程度だった。

ひとりデジタル目覚ましだけが、娘に直接話しかけ、彼女の絶望を共有することで、それを直接和らげようとしていた。すでにふたりは身内だったが、あるいは、兄に似た弟は、たんなる義弟として以上の　よそう、デジタル目覚ましの誠意をくさすのはこの物語の目的ではない。ともかく、これだけはいえる。デジタル目覚ましの優しさは、寡婦の危機的な精神状態を僅かなりとも和らげることに成功した。泣き疲れた人間の娘は、いつもどおりパジャマのまま、テーブルに突っ伏して眠りに落ちていったのだ。打ちのめされた体は完全には弛緩しなかったが、ともかく、極限まで追いつめられている人間は、このような開けた姿で眠りにつけるものではない。

デジタル目覚ましはそれを見届けると、なお床を鳴らして踊り続ける日時計と腕時計に、静かにするよう小声で命じた。

「二人とも、どたばたするのはやめてくれ。せつかくねえさんが眠ったんだから。でも、これでひとまず安心だ。少なくとも、あすの朝まではね。日時計さん、毛布を持ってきてくれないか。風邪を引かせちゃいけないから。僕にはちよつと重たいんだ。腕時計さん、どんな食べ物があるか見てきてくれ。明日の朝食は、ぼくらで用意しようじゃないか。ぼくらに作れるかわからないけど」

娘の肩に毛布を掛け、蜂蜜とパンが台所にあるのを確認すると、時計たちは明かりを消して、居間の適当なところに収まった。「おやすみ」

翌朝、もつとも早くに目を覚ましたのは日時計だった。彼は夜明けとともに活動を開始した。日頃傲岸な警察官である日時計も、眠る仲間を無理に起こして付き合わせるような無法はしない。彼は台所で湯を沸かし始めた。次に目を覚ましたのは腕時計だった。彼は戸棚から紅茶の缶を探し出し、なんとか蓋をこじ開けると、ポットに茶葉を流し込んだ。最後に起きたのはデジタル目覚ましだった。しかし彼は台所のほうには参加せず、娘の前のテーブルに鎮座して表示パネルの数字をゆっくりと、確実に、カウントアップさせていった。デジタル目覚ましの役割は、適切な時刻に娘を起こすことだったからである。

やがて、紅茶の香りが台所から漂い始めた。日時計がポットとパン、そして腕時計を載せた盆を運んできた。6時59分だった。彼らは『7時に』娘を起こすと予定していたのだった。彼らは時計たちであつたから、予定時間を過とうはずがなかった。日時計が盆をテーブルに置き、腕時計がぴよいとテーブルクロスに飛びのつた。デジタル目覚ましは、予定の時刻が近づいてくるのを感じていた。そう、7時に、目覚ましの電子音が鳴るのだ。娘はどんな顔で目を覚ますだろう。暖かい食事が用意されているのを見て、少しは笑ってくれるだろうか。三つの時計は、その時がくるのを計測しながら、待った。

6時59分50秒、51秒、

(おはよう、朝ですよ、ねえさん)

デジタル目覚ましは、すでに頭の中で第一声を決めている。

56秒、57秒、58秒、

そのとき、娘が目を瞑ったまま、がばりと上体を起こした。三人は驚愕した。パジャマの腕が乱暴に伸びて、舞い降りる驚のような正確さで、デジタル時計の天辺にあるスイッチ　目覚ましオフのスイッチ　を殴りつけた。ぱちん。すべては一瞬のうちに起こった。何が起こったか時計たちが理解するよりも早く、腕はぱたりと卓上に落ちて、娘は肘を伸ばしただらしない恰好のまま、まるで何ごともしなかったように、また、机の上に突っ伏した。大きく息を吸い込む音が響いて、それを吐き、今度は中くらいの勢いで長い深呼吸をおこなうと、娘はそのまま深いまどろみに落ちていった。

7時0分4秒。デジタル時計の電子音は、鳴らなかった。

目覚まし時計と娘がなぜ惹かれあったか、娘の時計とはなんだっただのか、もうおわかりであろう。目覚まし時計は起こすべき人を必要としていた。娘は目覚まし時計がなければ、時計としての本領を発揮できなかった。ふたりが結ばれたのは必然であった。そして不幸なことに、お互いを求め合うことによって、ふたりは別な必然をたぐり寄せてしまったのだ。娘の存在は、目覚まし時計の目覚ましたる機能を、殺してしまうことによって意義を得たのである。

物語はここで終わる。ただ、ひとつだけ付言しておこう。ふたりの弟であったデジタル目覚ましは、兄が生きてゆけなくなった理由を、ついに義姉には説明しなかった。アイデアの空に見下ろされたこの島では、それは避け得ない結果だったからだ。そして繰り返しになるが、夫たる目覚まし時計も、妻に遺書を残していなかった。彼女の心を守るために。どこにも罪はないのだ。だれにも罪はないのだから。

あなたの家には目覚まし時計があるだろうか。あなたの心にはこの娘が住んでいるだろうか。もし両方ともイエスなら、たまに、たまにでいいから、あなたの目覚まし時計を労ってやってほしい。ま

どろみを揺するあの音は、時としてあなたの心をかき乱すだろう。  
だが、あの音はあなたのために鳴るのだから。あの音がなければ、  
あなたは決して安心して床に着くことはできないのだから。たとえ  
毎朝あなたに拒まれようと、目覚まし時計は律儀に、明日も、ま  
た 鳴ろうとするだろう。あなたが彼を壊してしまうまで。

(了)

### その3（後書き）

ありがとうございました。ちょっと変わったお話でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7991f/>

---

と・け・い

2010年10月8日15時33分発行